ボードレール十九世紀の原史
―ボードレールから見たベンヤミン

東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻（ 2000 年度博士課程進学）
伊藤綾

「ボードレール十九世紀の原史」 ―この表題は、二十世紀ドイツの思想家W・ベンヤミンに着想を受けたものであり、本論は、 1980 年代以降のボードレール研究において欠くことのできない参照項となったベンヤミンのボードレール論をいかに理解するかということをひとつの課題とするものであった。

第一章「詩人ボードレールという神話 ―ボードレール受容の系譜」は、ボードレール作品の検討ではなくこれまで蓄積されてきた数々のボードレール論の検討から出発した。十九世紀末から二十世紀前半までのボードレール論の系譜をたどることで、彼が生きた時代において積極的なものとはいえなかった評価が、なぜ、また、いかに肯定的なものへと変化してきたのかを詳らかにした。 1870 年代以降、政治的・社会的解放による個人と社会の団結が自明なものではなくなり、十九世紀の主潮流であった啓蒙主義的普遍史の展望が決定的に効力を失った時代において、ボードレールは積極的評価を受けることになったが、それは、詩人の実存に失われた精神的･道徳的基盤を回復する社会的機能が割り当てられたからであった。

また、ボードレール受容をフランスおよびドイツの思想交流の視点から考える作業を通して、ベンヤミンがボードレールとともに始まりゲオルゲにおいて完成されると述べた「精神

運動」の潮流のなかに、ベンヤミン自身のボードレールへの関心も由来していることが明らかにされた。その「精神運動」は「頽廃」の超克をめざすものでありながら結果として「頽廃」の完成として定義されうる。この矛盾の認識ゆえに、ベンヤミンのボードレール論は、同時代（ 1930 年代）のフランスにおけるロマン主義の精神史における詩人理解およびその一環としてのボードレール理解（ブランによる「自由の主体」としてのボードレール等）とは一線を画す。ベンヤミンは、ボードレールを擁護しつつもそこに主体的能動性ではなく、ただ「歴史的に条件付けられた空虚な場」や「社会的刻印」を見出すに至る。そして、ボードレールという詩人の「生」ではなく、それが存在するための歴史的条件 ―ベンヤミンの言葉でいえば「十九世紀の原史」に着目したのだった。

第二章「「原史」と起源 ―ベンヤミンのボードレール論」においては、ベンヤミンのボードレールへの一貫した関心がいかなるものであったかを、前期・後期に分けて論じた。前期において、秘教的言語論の位相にあったボードレールへの関心は、後期においては「歴史的」な位相に移行する。ここでは、『パサージュ論』全体の構成の要とされた「原史」概念について論じることで、先に提示されたボードレールが存在するための歴史的条件について考察した。「原史」は、あらゆる歴史的事象を超え、むしろ歴史の外へ、すなわち「根源」へ向かうためのひとつの方法として考えられている。その着想は「生の哲学」に発するものだが、「生の哲学」は文芸を介して「真 の経験」へと遡行することで結果として歴史的時間を否定するのに対し、「原史」は、歴史認識の方途である限りにおいて、自然概念をモデルとした際限なき自己展開（生成や持続）とは同一視されえない。そもそも、「原史」は、あらゆるものに先立ち、時間の推移によっても移り変わることのなく、そこから全てのものが流れ出てくるような、また全てのものがそれへと還元されるような「起源」として理解されかねない危険をはらんでいる。たしかに、ベンヤミンがボードレールとともに注目したユゴーの詩作品における「古代が浸透した近代」は、「起源」と峻別されることが困難であるような「原史」の問題含みのあり方を呈していた。

ベンヤミンはこのような「原史」の弱点を自覚しており、ユゴーとボードレールの詩的経験の差異を強調することで、後者を介した「原史」の光景を一回的で進展のないものと定義する。ボードレールにおける「原史」は、アウラの凋落という危機的現実を隠蔽することはない。この意味で、ベンヤミンがボードレールを通して描きだそうとした「原史」とは、進歩史観を批判するものでありながら、「生の哲学」のごとく歴史そのものを否定するものではなく、「起源」に還元されるものでもなく、ひとつの歴史認識 ―「近代（Moderne）」という時代の認識 ―に結び付けられた概念であった。

ベンヤミンによって提示されたボードレール像は、「近代」という時代認識にもとづいて、連続的な歴史を批判する主体に重ね合わされる。ベンヤミンのボードレール論は歴史の連続性や均質性を直接的に批判した『歴史の概念について』（1940 年）と時代的に並行した仕事であった。しかしながら、ベンヤミンの読解の難点は、「近代」をボードレールの「現代性（modernité）」概念と同一視するような読解を行っている点にあり、その点は、ベンヤミンのボードレール読解の恣意性として、これまでボードレール学の側から批判されてきた。

このボードレールの「現代性」とベンヤミンの「近代」の間の齟齬から、第三章「現代性の歴史的位相 ―「折衷主義」と「哲学的芸術」批判」は出発した。「折衷主義」および「哲学的芸術」をアンチテーゼとする「現代性」の意義を再定義することによって、至極消極的なかたちではあるが、審美的な次元を超えたひとつの時代認識に通じる「現代性」の理解を確保するに到った。ここで、本論は、ベンヤミンのボードレール読解の難点がボードレール研究との間に生じさせたひとつの読解の通約不可能を解きほぐすに至った。

続く第四章「ボードレールの歴史観 ―ジュゼッペ・フェッラーリの「宿命論」からの影響」では、ボードレールの歴史認識を知る上で最も大きな参照項であるジュゼッペ・フェッラーリの歴史哲学を精査した。フェッラーリの歴史哲学は、十九世紀における「宿命論」の一例である。フェッラーリは政治参加への幻滅を経て歴史周期の実証的根拠の探索に向かったのであり、その歴史認識は政治解放に関する言説と深く結びついていた。それに対して、ボードレールの「諦念」は政治的行動を経由してあらわれるものではない。詩人は、本質的には、歴史哲学のような疑似科学的言説には無関心であり、歴史の法則性、もしくはそのような法則性の前提となる歴史の連続性そのものに懐疑的であった。

ここで再び、ベンヤミンのボードレール論が提起した歴史観に立ち戻り、それとボードレール自身の歴史認識を比較するとき、両者の間には明らかに差異があるといわなければならない。ベンヤミンにとっては、フェッラーリが依拠しているような「宿命論」は進歩主義の否定であるものの、結局進歩主義と表裏一体をなすものであった。すなわち、進歩主義を批判するだけでは不十分であり、その批判過程で生じる「頽廃」をも乗り越えなくてはならない、ということである。

第一章で確認したように、ボードレールに「頽廃」の預言者もしくは超克者として可能性を託されたのは第一次大戦後のことであった。詩人が極めて消極的なかたちで表明したにすぎなかった「宿命論」という歴史的法則性への違和感を、あらためて積極的に読みかえる契機が訪れるとき、そこにはじめてボードレールの詩人としての可能性があらわれてくる。すなわち、ボードレールの詩人としてのある種の評価そのものが、詩人「の」宿命論が明らかにされるにすぎない十九世紀的文脈ではなく、宿命論と対峙する詩人を論じるという―ボードレール自身を離れた―極めて二十世紀的な要請から生じたということである。

最終章である第五章「詩的散文の言語態 ―「後期ボードレールの相貌」」では、ボードレールの後期の詩作品の検討を行った。後期ボードレールの受動的な「態度」はイロニーとは異なるものであり、それは、散文詩における語りの持続の中で生じてくるものである。詩的散文の言説は、美術文芸批評やジャーナリズム、現代性の「生」の諸相の多彩さ・多方向的な充溢を才能ある詩人として思うままに表象しようとした試みと同一視されるものではなく、結局、現実へと送り返される回路を断たれた虚構に留まるものである。それは「歴史的に条件付けられた空虚な場」としての詩人の「孤独」を、読む者に絶えず確認させるような言語空間を打ち開く。本論ではそのような言語のあり方を「詩的散文」の言語態と呼び、それを詩が自らを自らに対する「熟慮」によって超えてゆく運動と理解することで、「芸術の終焉」の徴のもとに位置づけた。

ここで、本論は、冒頭において、ベンヤミンのボードレール論の検討を通して提示された

問いに立ち返った。それは、詩人は宿命論によって自己規定されるにすぎない存在なのか、それとも、行動によってそれを克服しえたのか、もしくは少なくともそれに抵抗しえたのかという問いである。自らの空虚さを甘受する詩人は、予言者でも救済者でもなく、詩人の言葉は、何らかの社会的機能を担うことはない。そのあり方は、自身の神話化・超越性・全能に対する懐疑を、あらゆる外在的批判に先立って含み持つ。

以上、全五章を通して、ベンヤミンのボードレール論が、それが生成するまでのボードレール論の系譜において占める位置およびその特徴を明らかにするとともに、ボードレールから発して、ベンヤミンが自らのボードレール論に「十九世紀の原史」という着想を重ねるまでを、十九－二十世紀の思想史的背景の検討を通して論じることで、ベンヤミンのボードレール論を数多のボードレール研究の二次文献として分類し、その真偽をはかろうとするのではなく、ボードレール作品からベンヤミンの企図を逆照射しようと努めた。